



## インドネシア共和国

新 田 嘉 輝\*

### 1. はじめに

遠くて近い国、というのがはじめの印象であろうか。インドネシア共和国は日本からみて、アジアの中では遠いところにあると思う。しかし、ここジャカルタに住んでみて、日本人居住者の数や、日本製品の占める割合は、私の予想をはるかにこえるほど多く、この観点からは近い国であった。私にとって、今回がはじめての海外旅行、そして海外居住であるから、他国との比較で話を進めるわけにはいかないので、見たまま、感じたままを記述することにした。

私の勤務するサンドラテックス社のジャカルタ工場には、ポリエステルファイバーの製造から、紡績、織布、染色加工、そして縫製まである。この中の染色加工部門の技術指導のために赴任して、1年が経過した。従って最も接触の多いのは工場の人達であり、この人達を通してインドネシア共和国を見ていることになる。

### 2. 地 理

インドネシア共和国は、アジア大陸とオーストラリア大陸の間、および、インド洋と太平洋の間に位置し、かつて“オランダ女王の首飾り”といわれたほどの豊富な天然資源を持っている。西はスマトラ島のサバンから、東は西イリアンのメラウケに至る（約 5,100km）世界最大の多島国家である。

総面積は約192万km<sup>2</sup>（日本の約5.5倍の広さ）、大小あわせて約13,700の島々から成り、その内約3,500の島々に人間が居住していると云われている。人口は1983年度末の推定で、約1億5千万人となっている。世界で5番目に

相当する。63%はジャワ島とマドラ島に集中している。気候は熱帯性で、赤道付近に位置するため、季節の変化はほとんどなく、一般には雨期と乾期に区別されている。年平均気温は27℃前後で、気温の変化はないが、雨期の方が若干下る。ジャワ島では、10月より翌年の3月までが雨期で、4月から9月までが乾期となっている。ここでいう雨期は、毎日のように、日本の夕立が降ると考えれば、一番びったりする。雷を伴ったどしゃ降りになることが多い。乾期になると、1ヶ月以上も全く雲のない快晴が続く。不思議というほかはない。

### 3. 歴 史

インドネシア人の祖先はインドシナから渡来し、ついで各地に散在するようになったというのが定説である。そしてヒンズー教文明時代、イスラム教文明時代をへて、1602年東インド会社設立の頃からオランダの統治時代が始まる。第2次世界大戦で日本の軍政下に入り、終戦直後の1945年8月17日にインドネシア共和国の独立を宣言した。その後余曲折をへて現在に至っている。

多島国家インドネシア共和国は、別個の文化、言語をもつ多くの種族が暮している典型的な多民族国家である。米国の人類学者H・ギアツによると、インドネシア共和国には、300以上の異なる種族と、約250の独立した言語が識別されるという。しかしこれにもかかわらず、インドネシア共和国には、他のAA諸国の多くにみられるような言語抗争はない。これは独立指導者たちが、各民族に平等な形でインドネシア語を共通語として採用したからである。もし彼等が優勢民族のジャワ人の言語を共通語として採用していたとすれば、今日の共和国の統一はなかったかもしれない。インドネシア語の採用は

\*新田嘉輝 (Yositeru NITSUTA). 日東紡績株式会社、インドネシア共和国在住  
機械工学科修士32年卒

独立指導者たちの最も大きい功績のひとつといえる。インドネシア語は、諸民族にとって平等であり、しかも学び易く、ジャワ語のもつ階級性がなく、民主的で新しい語いを作る造語力にも富む言語であったからである。今では学校教育はもちろん、大衆の楽しみであるラジオ、テレビ、映画もすべてインドネシア語であるから、その普及はめざましい。

#### 4. 交通

市内の交通は鉄道と自動車であるが、鉄道の占める割合はわずかである。自動車は自家用車とバスを含めた乗合自動車にわけられる。自家用車のほとんどは日本製で、高級車はベンツとほぼまわっている。バスは250ルピアの Pasta と呼ばれるものと、100ルピアのバスがある。バスの中には、これでよく走れると思われるようなものがある。

市周辺にはメトロミニと呼ばれる30人乗り位の小型バスがある。ベモと呼ばれる10人乗り位の小型車や、バジャイと呼ばれる3人乗り位の小型車、そしてベチャと呼ばれる2人乗り位の人力車もある。このほかにバイクがある。これらがまさに押合い、へしあいしながら走っているのが首都ジャカルタの現状である。

主要道路は舗装されていて、車社会の真只中にある国であることがわかる。断食あけの休暇などに、海や山へ出かける人は大変多く、遠い道のりをトラックに立ったまま（座ると乗車人数がへるからかもしれないが）何台も何台もできてくる。そしてそれぞれ気に入った場所で、陽気に楽しむすべを知っているのである。何がなくても、場所と時間とそして友があれば、それで全てということかもしれない。身体で楽しむ、肌で楽しむといった方が、よくわかっていただけたらと思う。

#### 5. 暮

インドネシア共和国でも、全体的にみて農村と大都市では国民生活の姿は大きく異なり、伝統的な生活と西洋型の近代的な生活の差が他国にもましてははっきりしている。私が居住する首都ジャカルタでは、林立する近代的なビルや新型

の自動車の洪水に驚かされるが、こうした生活に触れ、その恩恵なり被害なりを受ける層は、大都市居住者に限られる。国民の大多数は農漁村および、農産物中心の取引のための市場（パサール）を中心に各地に散在する地方の小都市に居住している。インドネシア共和国では人口5,000人以上の町を都市部に組入れているが、都市化率は全国で18.5%となる。

ここ10年間のインドネシア共和国の経済発展は、マクロの統計でみるかぎりすばらしいものがある。しかし貧富の差はむしろ拡大したというのが定説となっている。さだかではないが、世帯当りの月間所得をみると、人口の多数が50,000~60,000ルピア以下で暮していることになる。しかも1983年3月に39%のルピア切下げがあり、物価が上昇し続けているのが現状である。この物価については、「インドネシアの物価は高い」とも云えるし「非常に安い」とも云える。外国人居住者や金持たちが、自分たちのライフ・スタイルを維持しようとする、その生計費は一般に近隣東南アジア諸国に比べてずっと高い。しかし一方、同じインドネシア共和国で、お金持たちが高級レストランで1回の食事に支払う料金程度の金額で、1ヶ月家族の暮らしを支えている大衆の世界がある。数の上ではもちろんこの層が多い。このような低所得でも何とかやっていけるというのは、「驚くべき安い」物価の体系が存在しているからである。

人びとの所得や職種から暮らしの姿をみると、インドネシア共和国には、「本当の金持ち」(月収にして100万ルピア以上)が多数いる。統計的には確定できないが、人口にして1.5~2%が、こうした家計のもとに暮しているとみられる。それゆえこの国は、乗用車、VTR、カラーTVなど高級品の東南アジア最大の消費市場となっている。そして日本より立派な住宅が、つぎつぎに建てられている。

「インドネシア人は怠けもの」という無責任な発言がしばしばきかれる。というのは、早朝から田に出て一日中働らく農民たちや、バッテリーなど伝統的な手仕事に示されるこの国の職人たちの忍耐強い勤勉さをみようとしなからである。私の勤務する工場でも、女子が3交替

勤務をしているし、その働きぶりも、この国の衣食住の水準からみると、大多数の人達はよく働いていると言って過言ではない。

以上のようにみえてくると、一般の人びとの暮らしは終戦直後か、昭和20年代に相当し、そこへ現代の産物である自動車、バイク、テレビなどが入りこんでいる大変ややこしい状態である。

## 6. むすび

今回の執筆にあたり、あらためてインドネシア共和国を見直し、若さと活力を持つ国である

ことを痛切に感じた。私はこれを契機として、さらにこの国のことを一つでも多く知る努力をし、将来もっと近い存在になるであろうこの国の紹介を、私のまわりに展開し続けたいと思っている。

## 参考文献

- 1) インドネシア・ハンドブック, 1981年版, ジャカルタ・ジャパンプラブ法人部会

---

## 事務所移転のご案内

このたび大阪大学工業会館の移転に伴い、弊協会事務所を下記に移転し、昭和59年1月9日より業務を開始しております。何卒一層のご支援ご便達を賜りますようお願い申し上げます。

### 記

新事務所 〒530 大阪市北区堂島2-2-2  
近鉄堂島ビル20F大阪大学工業会館内  
TEL 06-344-6175

連絡所 〒565 吹田市山田丘2番1号  
大阪大学工学部内  
TEL 06-877-5111 内線 5253

---